

# 現代語訳 「小説八宗」

坂井 健

はじめに

斎藤緑雨の「小説八宗」は、坪内祐三・南仲坊編集『明治の文学 第十五巻 斎藤緑雨』（筑摩書房、二〇〇二年七月）に収録され、花崎真也・川岸絢子氏によるかなり詳しい注も付けられているが、緑雨のものの方が独特のため、いっばんには、なかなか理解しづらいようである。そこで、注を付けて、現代語訳し、緑雨研究の一助とした。本文そのものについては、上述の書物、または、『斎藤緑雨全集 第一巻』（筑摩書房、一九九〇年六月）を参照されたいが、本訳は初出本文を採用している『斎藤緑雨全集』によった。（『明治の文学第十五巻 斎藤緑雨』は再録本文によっている。）

小説八宗<sup>①</sup>

正直正太夫<sup>②</sup>

時勢は変遷いたします。その時々のは移り変わります。流行ものが毎日毎日掛け持ちをするのは、今日ただいまの世の中の約束である。ご覧なさい。改良熱<sup>③</sup>から分かれて出た流行物で、長持ちすることのできたものはあまり多くはございませんでしょう。そうでないのがただ一つ、往生しない小説の流行である。今もって寿命を繋いでいるのは、さてもさても命冥加なやつというべきである。とくに新しい手を出すのに飽きて、機械を使うのに疲れて、もう一度昔に返って、白痴のように、晦日の前に金を才覚しなければ<sup>④</sup>というのでもなかるうに、西鶴西鶴と嬉しがるものもあれば、起請誓紙でもないのに自笑<sup>⑤</sup>じゃとか、奇跡でもないのに其礎<sup>⑥</sup>調じゃと（これは洒落である。受け取らないということなら、いつでもお返しになっても差し支えない

い。ありがたがるものもある。実際、小説道は賑やかなことである。けれども、この小説八宗の目的は、現在大家と呼ばれる方々の御規則を初心者に示すことであって、どれにつこうともそれぞれの勝手であるが、なるべく御法度のだいたいをあらかじめ呑み込ませておこうという意図にほかならない。もつとも恐れ多いので、さまざまな書物を参照して解釈を施したものであるといえ、印紙を貼った証文とは違うので、万々一大家の思召しにそぐわない欠点もあるかもしれないが、正直正太夫は、悪態をついたり、黙っていて大家の皆さんの御徳を汚し申し上げようとするようなつもりではないことは、神かけて誓い申すつもりで、何となく必要があることを感じて書いた細工ごとなので、麻縄に縛られた西瓜を井戸に入れるように冷やかす<sup>(1)</sup>のだなどの御邪推は、くれぐれも無用である。世辞も愛想も色気も無い正直正太夫は、当然、どこまでも正直正太夫である。ただし、この八宗に入れられたといって喜ばれるには及ばない。漏れたからといってご心配されるにも及ばない。まず、今日を初めとして続八宗、続々八宗、続々々八宗と次から次へと選んで載せるつもりであるので、順番は一定の基準によつていないで、めちやくちやである。なぜなら、今の大家の数はかぎりがないからだ。

注

(1) 八人の小説家を宗派になぞらえたもの。実際には、六人で終わっている。

(2) 斎藤緑雨の別号。正直に本当のことを言うという洒落であるが、その名前で悪口を言われるのであるから、言われる方はたまらない。

(3) 文明開化の改良熱を指す。

(4) 井原西鶴を再評価した尾崎紅葉などを指す。

(5) 八文字自笑の「自笑」と起請誓紙の「誓紙」をかける。

(6) 江島其磧の「其磧」と奇跡をかける。

(7) 冷やしておくという意味の「冷やかす」とからかうの意味の「冷やかす」をかける。

一、おぼろ宗<sup>(1)</sup> 小説の癖を直すのは、この宗が元祖である。

小説に癖をつけるのも、また、この宗が元祖である。言葉を変えていうと、古い癖を直したければ、さらに新しい癖を付けたということである<sup>(2)</sup>。この門に入る者は、事実の極みであるとか美の極みであるとかは自分からは言わないけれど、よそでは言ういろいろな議論を脳裏に思い浮かべながら書くにかぎるのである。そのために防護柵に遮られて、思ったより舞台が狭くなる<sup>(3)</sup>ことがある。たびたび流儀を改め、こうでもない、ああでもない<sup>(4)</sup>と(言う。それなら)いつそお休みがよかろうと、門を閉じて「今日は売り切れ」と貼り紙をしておくのもよい。

小説の主眼は、百八煩惱を写すのだ、それまでのこととそつげなく始めて、そつげなく終わるのが得意である。<sup>(5)</sup>けれども、その間にさすがは、さすがは、と二口続けて言わせるだけの妙所は備えているのだ。小説が盛んなころは黙っていて、少しさびれた頃を見計らって、小説は文壇上の芸術である。スコット、リットン、デューマ、エリオット、フライ、オムレツ、ライスカレ<sup>(6)</sup>をしのぐ傑作を世の中に出せ出せと、一通り触れ回って、さて、それで、自分は門を閉じることが、この宗の真言の秘密である。<sup>(7)</sup>詳しくは大久保あたりで中にいるか外にいるか宿にいるかと呼んだらいいだろう。多分、返事があるだろう。大江の千里という曲者が、はやくからこの宗をネタに詠んで新古今集に載せている。曰く、テレもせず困りもはてぬ春の舎のおぼろづくりにしくものぞなき<sup>(8)</sup>。試みに安宅の松鮪<sup>(9)</sup>に命じて、おぼろを食わせると言えは、味わいはだいたい分かるのだ。待つ間が辛かったら、臚の罪や松の影と鼻歌を歌つたらよい。これが煙草（の煙）を輪にして吹く変わった形である。（後はおいおい書きます。）

注

(1) 坪内逍遙の別号は、春の舎おぼろ。

(2) 『小説神髓』が勧善懲悪を否定したが、小説を写実主義の型にはめたことを指す。

(3) 鷗外のように抽象的な議論を好まないことを指す。

(4) 写実的で平凡な主人公の心理を中心としたために小説の範囲が狭くなったことを指す。

(5) 「小説の主眼は、百八煩惱を写す」は、『小説神髓』の根本的主張。

(6) 「フライ、オムレツ、カツカレ」は、カタカナの作家を並べたことに対する皮肉。

(7) 逍遙は、明治二年一月細君を発表してから、小説の筆を立っていることを指す。「小説八宗」は、明治二年一月。

(8) 元歌は、大江千里の「照りもせず曇りもはてぬ春の夜はおぼろ月夜にしくものぞなき」（『新古今』）。臚月夜の美しさをたたえた古歌を引き合いに出して、「春の屋おぼろ」が作る作品以上のものはない、という意味にしたもの。いちおう、逍遙をほめたたえている。

(9) 江戸の安宅にあった松が鮪。「おぼろ」の鮪が名物であった。「おぼろ」で作った鮪と「春の屋おぼろ」にかける。

(10) 「松」と「待つ」をかける。この年の一月、逍遙が「細君」を発表して以来、新作を発表しないことを受けて、新作の発表を期待したもの。

(続)

一、二葉宗<sup>(1)</sup> またの名を四迷宗という。迷宗は、迷執である。あるいは、妄執であるともいう。妄執の雲が晴れて

いない隴夜の恋に迷った我が心、と長唄鶯娘にある<sup>(2)</sup>。

思うに、この宗の宝物である「浮雲」を詠みこみ、かつ、おぼろ宗と縁故のあることを言い現わしたものであろう<sup>(3)</sup>。この宗も昨今は門を閉じている<sup>(4)</sup>。これではどうかあれではどうかと迷いに迷って、何度となく膏薬を練るのである。名前はその体を現わすとか。四迷という名前も前世の約束である。四つ辻に立って泣いた中国のおじさんも、これにはどうしようもないと匙を投げたということである<sup>(5)</sup>。土台がロシア文学なので、緻密緻密とやらに緻密がるのをよしとする。「煙管を持った。煙草を丸めた。雁首へ入れた。火をつけた。吸った。煙を吐いた。」とこのように言わなければならぬ。吸いつけ煙草を形容するのに五、六分くらいかけることは何とも思わない。そのあいだに煙草はたいいて燃え尽きるものがある。緻密が主であって、御本尊に対して土下座しろと声をかけるときがあるが、ぜんぜん問題にしないのだ<sup>(7)</sup>。ひたすら、緻密々と緻密であるように全力を尽くそうとする。緻密であろうとする算段は、二葉亭のときから素晴らしくなったと評判されることはまちがいない<sup>(8)</sup>。ときどき翻訳するのもよい。ただし、緻密を忘れさえない<sup>(9)</sup>ので、なるべく頭も尻尾も無いものを選ぶのがよい。

#### 注

- (1) 二葉亭四迷を指す。したがって、四迷宗ともいうことにならる。
- (2) 歌舞伎の舞踊の地唄。白鷺が娘の姿で踊るといいうもので、その冒頭の歌詞。
- (3) 「妄執の雲」から二葉亭の代表作『浮雲』の題名を、「隴夜の恋」から二葉亭が春の舎おぼろ、すなわち逍遙と親しいことを連想している。
- (4) 二葉亭が『浮雲』三篇を二二年八月発表した後、中絶していたことを指す。
- (5) 中国の古典『蒙求』の「楊朱泣岐」を踏まえる。中国の思想家楊朱が、道が分かれているのを見て泣いた。そのわけは、北にも南にもいくことができるからである、という故事で、いったん踏み出してしまうと、その先は大きく分かれてしまつて、元に戻ることができないということ。二葉亭がああでもないこうでもないと思いついて迷っているのを受けて、いくらいつたん踏み出したら後戻りできないといつても、こんなに迷つてばかりいるのでは、どうしようもないという意味。
- (6) 二葉亭四迷は、ロシア語が専門でロシア文学の素養があることを指す。
- (7) 描写の細かさばかりに気を使って、肝心の作品の内容がおろそかになつていゝことをいう。
- (8) 「梅檀は双葉より芳し」(立派な人物は、幼い時から優れている)を「算段は二葉よりも芳し」ともじつたもの。
- (9) 描写が細かすぎるので、起承転結のない作品を選んで訳すとよい、という皮肉。

一、**篁村宗**<sup>(1)</sup> この宗は、すべて軽さを尊ぶ。もつとも、篁

村宗それ自身が尊ぶのではない。世間で尊ぶのである。

吹けば飛ぶようなものであつても、その辺は少しも気にしないのがよい。まあ、いいよ。僕は僕だよという心がまえば、いつもそうありたいものだ。主眼はと問うならば、洒落と答えて、ひとりで納得するのがよい。趣向は、深いのを嫌がる。深いと自然と重苦しくなるからである。別の名を竹の舎宗という。<sup>(2)</sup> 竹が生い茂ると藪となる。藪はへボな医者<sup>(3)</sup>のあだ名である。へボな医者は、太鼓持ちを兼ねるのが多い。だから、口が軽い。この宗が軽いのは、これとは違っているが、これと似せてみせるのである。治国平天下、風なく、波なく、いつもおめでたいのかぎるのである。京伝<sup>(4)</sup>か、いや三馬<sup>(4)</sup>だ。三馬か。いや其磧<sup>(5)</sup>だ。いや其磧か。いや篁村<sup>(6)</sup>だ(秋成は略)、とこのように決め込みながら、どこか臭いところがないわけではない。いや、保存しておいて、たまたま生煮えの宗派の敵に嗅がせてやる<sup>(7)</sup>ことがある。「幸せの風よ、吹井の浦<sup>(7)</sup>に吹け。その評判も高師の浜の「たか」<sup>(8)</sup>ではないが、高いことだ。」などは、その一例であつて、鳥に対する案山子とは訳が違ふのだ。冷やかしたでもなく、冷やかさないでもなく、軽くて微妙な中に、自然と面白さがあるものと、宗徒はもちろん、和尚も承知しているだろう。

この宗は、肉食妻帯を禁じている。御膳の上には、柚子味噌と根岸の竹の子<sup>(9)</sup>に山椒の佃煮をちよいと箸の先に引っ掛けて、なめながら、独酌で酒を飲んでる感じである。今にお肴が出るよというのを何かと見ると、湯豆腐だと知ることになるだろう。他宗から口やかましい人が来ると、とかく角を立ててはいけないうえ、縁のない衆生は助けることができない、と横を向く。そうでなければ、いいさ、いいさとあごで返事をするなど、くれぐれも自分自身で理解することがこの宗の肝心の秘密である。この頃、この宗のために三味線を弾いて、持ち上げ、「篁村宗がまさに広められようとしている。」と触れた親切者があると見受けた。(あとは、追いつ追いつ書きまします。)

注

- (1) 饗庭篁村を指す。根岸派の中心人物とされた。
- (2) 饗庭篁村の別号は、「竹の舎(屋)」。
- (3) 山東京伝のこと。
- (4) 式亭三馬のこと。
- (5) 江島其磧のこと。
- (6) 上田秋成のこと。
- (7) 三重県にある砂浜。歌枕。
- (8) 大阪府下の海岸。歌枕。
- (9) 篁村は江戸根岸に住んで居た。

(続)

一、美妙宗<sup>(1)</sup> この宗には、秘蔵のお経がある。言文一致と名づける。あくまでお経に酔つて、身だしなみを繕う見栄っぱりである。一時は、ありがたい、ありがたいを唱える者がひじょうに多く、小説を書く近道は、ここを渡れと大繁盛をきわめたが、近頃は少しさびれて、「漸寒や石の仏を刻む音<sup>(3)</sup>」である。何でも、一夜漬けじゃ、甘酒流<sup>(4)</sup>じゃと口上を付けて、これが美妙宗の本体じゃというものは、あまり人に見せないのが得意である。思うに、雑兵の服を着て敵の大将に近づこうとした何某の軍略にならつたものであろう。ある者はこの宗を銀流<sup>(5)</sup>しといつた。ひどいことをいうものだと思つたが、だんだん考えていくと、早く剥げるといふ意味ではなくて、早くできるといふ意味であつた。さてさて名譽のことだなあ。この宗の初級は、まあ、こうやるのがよい。「向こうから来たのは男です。下駄をはいています。が、下駄の歯が減っています。そして頭は刈り込む前の散切り頭です。フケの雪が襟の麓に積もつていそうです。これが女ならどうでしょう？ 鬚を結っているに相違ありません。」また、時々これまで聞いたことのないような新説をさしはさむことがある。その見本は次のようである。「酒をお

チョコに注げばおチョコの形です。酒を升に注げば、升の形です。実に酒は、四角でも丸い器にでもしたがいませす。水もまたその通りです。が、水は酔いません。けれども、酒も水も流動体です。」総じてこの宗は熱心に經文を唱えるのである。他宗の耳に入ろうが入るまいが、絶えず休まず言文一致経を繰り広げることには、頭に尊称の言葉「ゴ」を加え、「デ、ゴザイマス」で結ぶので、ご苦労でございますと、申したいくらいであると知るべきだ。

#### 注

- (1) 山田美妙。言文一致を主張した。
- (2) 「因つて」と「酔つて」をかける。
- (3) 蝶夢編『新類題発句集 秋之部』の「漸寒」に見える嗽石の句。盛んであつた言文一致が衰えたことを、秋の気配が深まつてきたことに例える。
- (4) 山田美妙『胡蝶』(明治二十一年)の序文に「これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒では有りません。」とある。甘酒は、一晚で作れることから、簡単に作れることをいう。
- (5) 水銀に砥の粉をまぜて、銅などに擦り付けて銀色に仕上げること。簡単に出来るが剥げやすい。転じて、外見だけで、中味が悪いことをいう。

一、紅葉宗<sup>①</sup> 硯友大師<sup>②</sup>のなわばりの中にあつて、一段とたくましいのを紅葉宗という。紅葉は、もみじである。紅葉の錦神のまにまに<sup>③</sup>というように、この宗は神仏混交と見える。雅俗折衷<sup>④</sup>というのも、思うに理由のあることである。白楽天を気取つて、紅葉を焚く<sup>⑤</sup>。焚くのは護摩である。鳴るのは滝である。護摩を修するには、凡人の知らない秘法がある。作れば菓子となり、消えれば灰となる。皆この護摩の行ないである。宝物が三つある。曰く……曰く——曰く<sup>⑥</sup>。ずいぶんめまぐるしく用いる<sup>⑦</sup>。

その用法は文盲手引草<sup>⑧</sup>という書物によつて、この宗自らが世に公にしているので、略す。ただし、ちらーほら、あやーふや、ありゃーこりやなど一つの方法を押し通そうとするすばらしい宝物だ。西鶴<sup>⑨</sup>という曲者をかくまい、つとめてオツな作り方によつて、筆の省略、省略と、やたらに無精に世を送ることを専門にする。いくらかは俗物に理解されないが、みやびに詳しい人には、やはり理解できないくらいをよい加減とする<sup>⑩</sup>。これが雅俗折衷の本旨であつて、簡単に兜の内側を見透かされない方法である。なまめかしい姿で世を惑わし、美しい衣装で愚か者を驚かすとその方面に詳しい本にあるのをみて、上の句を美妙宗に送り、下の句を紅葉宗に贈ろうと、実に勘の悪い男がつぶやいたのもおかしい。この宗は、文に綴

つたつもり、字に書いたつもりで、実は自分の心の中で納得しているのを良しとする。「うむ、はてな、うむ、はてな」と向うの裏の愚か者が忘れ物を探すような心意気で、いつも身の周りをとりまいてるように心がけようとする。趣向は、支離滅裂でも、頭で考えたものでも、金箔、銀箔、手あたりしだいの箔を塗つて、これはうまいといわせることが大切なのだ。うまいといった男に分かつたかと聞けば、どうかねとばかりで、そのあとには言わないことが不思議であるが、これもすなわち無精であるから、行き渡らないのだ。行き渡つたならば、紅葉の美しい錦が途中で切れてしまうだろうという教えである。要するに、この宗は、しきりに何とかぶりがつて、折衷ぶりがつた揚句、町内の頭が婚礼の媒妁を頼まれて、高砂やの稽古がすでに終わり、羽織・袴をつけた嬉しさに、「どうだ」とあごを突出して挨拶する様子がある。折衷したがる調合が得意とみえて、薩摩汁を作り損ねた心得が大切である。「どちらも煮たものーかぼちゃと唐茄子」(おや、あなた。いいえ嘘、おほほ。)これが紅葉宗の本領である。この宗の奥義を知ろうとするなら、まずこの解釈を試みるべきである。合格不合格は大体これで分かるのだ。とにかく、この宗は、インキが高い安んにかかわらず、節約を旨として、言いたいことを半分

で見合わせて、しかも、腹の減らない宗旨だと知るべきだ。<sup>(10)</sup>二月の花よりもくれないと言うので、節約、あるいは、ケチであるかも知れないだろう。この宗には、子飼いの出納係がいる。悪太郎<sup>(11)</sup>という、なかなか真面目なやつである。

#### 注

- (1) 尾崎紅葉を指す。
- (2) 硯友社を指す。尾崎紅葉は、その中心的人物。
- (3) 菅原道真の「このたびは幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」(『古今集』)を指す。仏教の宗派になぞらえているが、紅葉ということは、菅原道真が昔、歌で紙に奉納しようとしたものだから、神仏混交だということ。
- (4) 白楽天の「林間暖酒焼紅葉」を踏まえる。
- (5) 尾崎紅葉が『二人比丘尼色懺悔』(明治二年)で、……、——、( )を多用したことに對する当てつけ。
- (6) 『文庫』二六号(明治二年九月)、二七号(明治二年一〇月)に、「……」、「!」、「?」、「」についての説明がある。ダッシュについては、『小説群芳第壹 初時雨』(明治二年、昌盛堂)に説明がある。
- (7) 紅葉が西鶴調を尊んでいたことを指す。
- (8) 俗物にも通人にも分からない、と中途半端さを皮肉っている。
- (9) 「竜田川紅葉乱れてながむりわたらば錦中やたえなむ」(『古今集』)をふまえる。
- (10) 肉と野菜のごった煮である薩摩汁を作りそこなった、とい

うのは、地の文を文語で、会話文を口語で書く雅俗折衷に、西欧語の記号を取り入れて、出来損ないを作るのが本領であるという皮肉。

(11) 「煮たもの」と「似たもの」を掛ける。薩摩汁からの連想で「煮たもの」を引出、それにつなげたもの。

(12) 「物言わざるは腹膨るる心地す」を踏まえて、言いたいことを半分まではいつているが、結局、言いたいことを言いきれていない、という皮肉。

(13) 「霜葉は二月の花よりも紅なり」(杜牧「山行」)を踏まえて、紅葉の筆名をちらつかせながら、「紅」と「呉れない」を掛けたもの。

(14) 尾崎紅葉を指す。

#### 一、思軒宗<sup>(1)</sup>

この宗を八宗の一つに数えるのは無理である。無理であるけれど、お宗旨である。その無理というのは、隣の家の釜を借りて飯を炊くように、翻訳づくめだからである。その「無理であるけれど」というのは、隣の家の釜を焚いて飯を炊くといつても、小説道に時々は踏み込まれるからである。お経は、ひたすら簡潔で、さらさらとしたのを最上位と定める。どうかこれを見なさいと私子の先に銘を打って取り掛かるのである。「あの者は、そんな風に行った。私は、こんな風に帰った。」と、カクナノ肩を怒らせて、召使の小女に八つ当たりするよ

て、とても寒いという日に、前の前の前の朝買った納豆の残りで、お茶漬けを食べるという流儀と知るべきである。平たく言うと、禅味がたつぷりで、ほかの味はほんの少しということである。臭いの強い食べ物や酒は山門に入ることを許さない。この宗は、あまり広まらないのが、本意であろう。だから詳しくは説かない。随喜の涙を流すのは、流す人のそれぞれ勝手であることだ。

(まだあるよ)

## 注

(1) 森田思軒のこと。翻訳家。ジャーナリスト。漢文書き下し調欧文直訳体(周密体)、通称思軒体で名高い。翻訳王といわれた。

(2) 僧侶が祈禱のときに手に持つ法具。

※本稿は、江蘇省社会科学基金「坪内逍遙文論中的中国文化要素研究」(蘇州大学、研究代表者 潘文東、二〇一六〜二〇一九年)による成果の一部である。